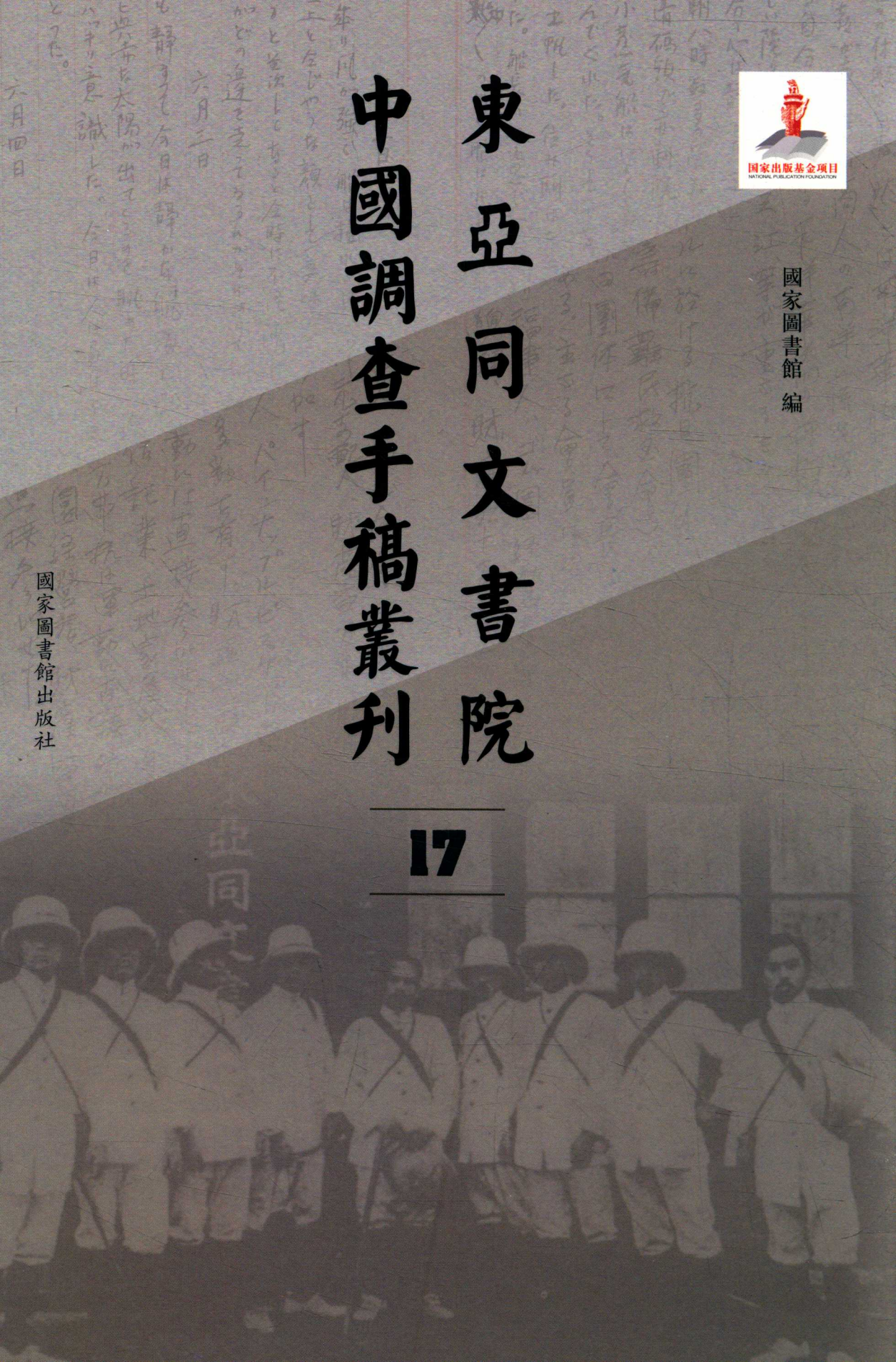
東亞同文書院中國調查手稿叢刊

17

國家圖書館 編

國家圖書館出版社



國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

東亞同文書院中國調查手稿叢刊

17

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

第一七册目録

昭和四年(一九二九)旅行日誌(第二十六期生)

矢尾勝治　第五巻……一
中尾義男　第六巻……九三
齋藤暉夫　第七巻……一六三
大工原亮　第八巻……二六九
林田誠一　第九巻……三三五
中下魁平　第十巻……四〇九
江口渉　第十一巻……五一七
福岡英明　第十二巻……五四九
田中玲瓏　第十三巻……五八五

四川旅行日誌

廿六期生
矢尾勝治

東亞同文書院調査報告用紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東亞同文書院大學圖書館印

第五巻　調査旅行日誌

1

廿三日（晴天）

行!!! 大旅行!!! 私達が三年の間苦書院生活が始まると同忘れ得ぬもの、一つである此の壮企が終に私に巡って来たそしてあの若葉の繁る書院院庭に同行の士七名の若者が何となしに將来の事を司る張き鎖りとして繋がる者として列んだ時!!! そして今迄送る身分の者が送らるゝ身分にふった時!!! 其処に留る者より行く者に多くの愛書がある「嵐吹け吹け」の大旅行歌も諸先生学生の前途を祝する言葉も全て嬉しくも又涙ぐましくもあった。元氣で行って参ります 元氣でと独りほゝに涙が宿る 一言の挨拶も全学生にしたくもある。さらば書院よ。汝と生あらば又九月合はん、其時には汝は変らねど俺は変り居るかもしれぬ。元氣たれ我等は支那の為め日本の為め小さいパイオニアたらんとして四川の山奥へ進んで行くで

あらう。

かくて書院を出たそしてK洋行のKさんに挨拶に行った自分の父親の如く思って居る人なのだ色々と注意して呉れた上に「元氣で行ってこい病氣其他の事故のあった場合は心配せず電報でしらせる様に」と言って呉れた、其言葉は自分には全身の血を逆立てた程喜しかった過ぎる日の色々と面倒の上に此の厚き心を何と感謝してよいか？弱きが故に強きを求めるそして慰める人の強きを取らんと言へばそれ迄だらうが自分には決して此れがそう受取られ様かア

此の言葉に報ゆる表現は涙と有難うだけだった、

安田の鋤焼も上海に於ける最後の晩餐として平常と異る意義を持って皆が愉快の中にも緊張した氣分を味った。

北站の別れも感激に充ち充ちて都舎を後に愈〻支那の内地旅行の路についたのである

五月廿四日（晴天）

昨夜はMの急病で班員が色々と心配して何かと看護をして早速看護婦の活動が始まり胃加答兒か等と診察をして名醫を振りを発揮した　然し一朝方からよく寝て居ったので安心したが其の為め班員の者が眠たくて南京に伴着いた頃はほとほと活動力が鈍り三名は眠る為め宿に泊る事にし僕等四名は孫文陵及明の孝陵を見学に行った、明の孝陵の偉大に驚き其の当時の政治の如何に整備されて居たかを想像させられ又其の隣り合はせに現代偉人孫文の陵を見る　其の壮大さは明の孝陵に及ばざれども現代的の道路及其の建築は如何に現國民政府が努力を振り廻して人民の幸利

民利を夢視して此の大事業をやり遂げた其の偉大さを認めるに十分である 山腹に遥か明の孝陵を見下して我が物顔に現代建築の粋を集めるコンクリート造りの建築 白石の階段十五哩もあると称する中山路そして其の間路を造り上げる迄の彼等のエピソード等思ひ浮べ彼等の精神の偉大さを認め得るが間違える所の手段を思ひ浮べ支那人民の為め一般に苦しめられる弱き者に強き義気のないものかと考へざるを得ない然し現南京の市情は支那一般に見られぬ程活気を呈し其の昔明治の維新を思ひ起す様な気分がする其処には三ヶ所アイナーが立ち並ぶ様に思はれる。

次で領事館を訪問する 昔の城跡を偲ばせる様な小高い丘に日章旗を見る 此処で目で見る此の丘の領事館であらゆる侮辱を受けそして先人の心をして如何にかやまった事だろう其の為には

荒木大尉の自殺と迄行って在留日本人の淚をそそいだではないか
其の人の心意はどんなであつたらう。そんな事なども思ひながら南
京岡本領事を訪ねる。
領事は現國民政府の膝下にあつて色々と難局に当る事多く其の困
難も思ひやられるが我対支政策の誤られる事、我現内閣の不定見
なる事、支那人一般民衆を小供視して事を処せねばならぬ事等
力説せられ我国民が若き深く支那を知つて寧ろきたいと決論せ
られた。同文書院先輩多数来合はせ過想談を聞き其の若き時
に於ける色々なる出来事を時代色をつけて話された。二時頃宝来館に
帰り旅行第一日の旅程を終る。
五月廿五日（晴天一時雨）
南陽丸七時出帆との事で朝五時出発起床して碼頭に行く
が中々容易に着かない。十時になり着いて十一時過船のはこびに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

至る。此日一日無事。

五月二十六日（晴天）

南陽丸船中にてのどかな初夏の一日を過す。

五月二十七日（晴天）

霧き通る様な青々とした空を見ながらいよいよ南陽は長江を遡江を続けて漸く十一時頃黄州に着いた。蘇東波が赤壁の賦を歌った所で有名であるが実は赤鼻山の発音が同じ為めに此の大なる間違を出来さしたとの事等思ひ浮べ此んな事など話しながら暑い大陽の下を航行して三時頃漢口に着くさすが長江の中継港として発展した所だけあって其の物出物、人の旺盛なる事は一見して知る事の出来る程船舶輻輳して且商業機関の重用なる役目を成す銀行倉庫汽船会社の多きを見ても充分に了解し得ると思った。

漢口着後日清汽船会社に色々と此後の旅行の事に付き打合せに行き日清の先輩は色々と世話役所にする様にかつた、書院気風の美しき所は各自が持ちて やはりちつかしき紅樓路の空に飛んで先生達の月旦舎からい学生の気位の変遷、院長問題等々とつて書きさる有様にて初夏の夜楽しい温い家にて過し自分達先輩の如何に美しき心根を感謝せずには居られぬ。

五月廿八日（晴天）

漢口初二日目印象甚深い漢口に一層深からしめたのは暑さの甚しき事で少からず暑さの為め閉ケた。寒暖計は八十五度に登り日本の真夏を思ひ出す。

漢口!!漢口!!! 先輩の歓待・暑さ・此等は永久に忘れえぬ思出とかつた。午前中は商業工会議所に行き色々と参考材料を求めたりして漸く調査の下準備にかゝる。

東亞同文書院調査報告用紙

色々と求めたが十分な調査資料も集らぬ仕方なく漢口素材取扱店嘉定洋行に行き色々と帰去詰に相成った。上重慶の出張員に紹介してもらった。

其後領事館を訪問したが先輩田中漢口領事は不在にて總領事柔嶋主計及警察署長を訪ね色々と漢口の事に関して話してもらひ午後武昌見学に行く様にお帝ひ為る。

一時半領事館差廻しの小蒸氣にて対岸武昌の有名な黄鶴楼に行く、余り支那の名所には今迄の経験上も期待を持つ事が出来なかったが、やはり此処も昔の偲影はなく処へやら算命屋と照像館の巣窟となりほとほと淋しく感じた。

武昌は由来弱之洞の心を盡した町にて漢口の商業市街に対して武昌は政治、教育軍事の中部支那に於ける中心として見られ又学生の多い事及其の服装の日本の中学生に彷彿する

があって旅愁を慰めて呉れた。

五月二十九日（晴天）

今日は嬉しかった漢口を旅立て宜昌に向ふ日だ。そして漸く旅行の目的に突進出来べき日ふのだと思って朝早く起き面色々と役所に行ったW様に御礼旁々昨夜の不注意から蚊取線香で焼へたての青畳を焼いた事等詫びて八時半六碼頭へ小蒸気に乗り廻り先輩其他の見送りを受け漢口に別れを告げて宜昌に向った。

五月三十日（晴天）

一日中遡航を続け暑熱に苦しむ

五月三十一日（晴天）

真夏の様な暑さの中を大享丸は遡江を続け三時半に沙市に着く、相当名高い街ふので期待して居たが余り繁栄をして居らぬ

碼頭の近くに煉瓦建の支那人経営の棉花 press 工場が異彩を放って居る 物産としては棉花を第一として碗豆等が出る。

日本人の在住は日華製油、日清汽船、領事館員位である九月頃から棉花買出しの為め日本人の往来繁く盛に書買行はるとの事、又沙市は学生の居ない事と日本人が主として顧客なる関係上排日運動は殆んど履行れないとの事にて喜しく感じた。

碼頭附近には武漢軍の武装解除兵一万近く居て非常に物騒だった。四時開船して六時頃江中に仮泊する。

六月一日（晴天）

平坦な平野を走って午後六時頃漸く宜昌に着く湖北省に於ける西部地方の港にて相当の繁栄をして居る盆地に住する街にて市内は電燈自動車等の文明機関多くして多くは黄包車多く鞦韆に轎る王見る、川漢鉄路の跡あるも支那内乱

の為め其の運行を見ずして一部建物のみ残存せる
夕方から久川旅館にて先輩の田中康雄さんの歓迎会に招き
六月二日 晴天
宜昌に就いて大体の事を書く事にしよう。宜昌は開港場なるも
其の土地其のものに物産を産するに非ずして四川省及湖北省
西部一帯の物産の仲継所に過ぎず故に重慶航路より
好くなり且直接航行の可能となりたる場合は衰微せん運命に
あるものなり。
貨幣単位は往時の我國のと彷彿して居り即一兩は四分の
一は一分にして一分は二十米なりしが宜昌にては一串は四串
一串は一千文の逆法にて別に又一角は大洋勘定の辺みも
あるも一般に行はる事少し
日本人は約七十人余りにして其の従事せる事業は雑貨商

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com